

その瞬間、憧れの選手と ボールひとつで結ばれた。 ぼくの心に感動が残った。



夢と感動の14日間 クロアチア代表 十日町キャンプ

2002年6月30日、世界中を狂に包んだFIFAワールドカップは、ブラジル5回目の優勝で幕を閉じました。勝者のみに栄光が与えられるスポーツの世界で、ブラジルのほかに“もうひとつの優勝”を手にした国があります。

その国の名はクロアチア。代表チームが十日町市で行った14日間のキャンプで、彼らは人々の心に渋々しい思い出を残し、たくさんの友情を育みました。そして、勝負を超えて永遠に輝く“もうひとつの優勝”を手にしたのです。

キャンプ期間中、シケル選手は、「クロアチア代表が優勝するのは難しかかもしれない。しかし、ワールドカップにはもう一つの優勝がある。それはホストとなってくれた十日町市の人々と友情を育み、素晴らしい思い出を残すことが、優勝にも値する大切なこと」と話していました。

その言葉通りクロアチア代表は、子供たちや地域の人々との友好を大切にする姿勢。プロフェッショナルとしてひたむきに練習に打ち込む姿勢を示しました。その姿が人々の心をとらえ、胸の奥に感動を刻んだのです。

ワールドカップは終りました。しかし十日町市には「まるで遠くの親戚が帰ってしまったようだ」と、今なお親近感と寂しさを口にする人々が数多くいます。4万3千人の地方都市十日町市と、アドリア海に面した美しい国クロアチア。熱狂に包まれたワールドカップの中で、心温まる友情が十日町市とクロアチアとの間で育まれたことを、この記念誌でお伝えできれば幸いです。



クロアチア色に染まる街

キャンプ決定を受け、代表チームを温かく迎えようという気運が日に増して高まりました。国旗や歓迎旗、バナーなどがあちらこちらに飾られ、街はクロアチア色に染まっていました。駅通りには市の幼稚園、保育所の子供たち一人ひとりが描いた1,400本の応援団旗が掲げられました。

また、クロアチア料理が給食に

取り入れられ、幼稚園、保育所、小中学校の子供たちが食による国際理解を図りました。さらに総合学習の時間を使い、クロアチアを学んだ小学校も數多くあります。

十日町機械工業協同組合青年部会では、伝統の染色技術を駕使し縦3.6m×横7.2mの巨大なクロアチア国旗を作りました。旗は5月のきものまつりで歩行者天国の大

空に翻り、訪れた人にクロアチアを強く印象づけることができました。その後、旗は宿舎となったホテルのロビーに飾られ、選手を激励し続けました。ほかにもクロアチア語の勉強会やボランティアの現地説明会、ボールボーイの募集、旅館組合や飲食店組合への外国人受け入協力要請など、キャンプ準備が着々と進められていったのです。



沿道を飾った歓迎メッセージ



边境地区(駅通りアーケード)



ホテルロビーに飾られるクロアチア国旗



クロアチア語修習会(情報館)



ボランティアの養成現地説明会



グラウンド入口歓迎門



夢叶う瞬間



国の違い、言葉の違い、大人と子供…。サッカーはボール一つで人々の間にあるすべての壁を手品のように消し去り、心と心を結びつける。

5月24日、クロアチア代表チームは子供たち約150人を対象に「サッカーレッスン」を開いてくれました。「子供たちに夢をえてほしい」という地元の願いをこころよく聞き入れてくれたのです。教室では、目の前に立つ代表選手を眺し、そうにみつめる子供や、膝の下まで垂れたブカブカのビブスを着てボールを追いかける子供の姿がありました。

前半の技術練習で、選手たちは身ぶりを交えながら、ドリブルやヘディングを指導。うまくできた子供とハイタッチを交わしたり、頭をなでたりする姿があちらこちらに見られました。

そして教室の後半には、誰も見た

ことないような、素敵なプレゼントが子供たちに贈られました。それは、代表選手全員対ちびっ子150人の試合です。

キックオフと共にプロキツキ選手がボールを手にとってパスした後に、シェルケ選手がゴールを決めました。ヨジッチャ監督は、双方にレッドカードを与える演技をし、ゴールキーパーのブリーナ選手を相手に、地元の子供にペナルティキックをさせました。ほかにもドリブルをする子供を選手が後ろから高々と抱き上げたり、ボールが2つ3つと増えたなど、心憎い演出が次々と繰り広げられました。

最後は、トマス選手が、地元の子供からボールを奪われた際に重傷を負った選手を慰めました。何人かの選手は救急車のサirenの音を口でねまし、実際に担架まで持ち込ん



うれしさのあまり額にサインしてもらう東小児童



記念撮影 東小学校4・5年生



クロアチア曲を演奏する十日町小学校4年生



伝統の着物でお出迎え



子供に話しかけるクロアチアサポーター



本部を訪れたクロアチアサポーターとボランティア



クロアチア・十日町市民交流イベント



ウェルカムパーティーで火把型土器を手にするクロアチアサッカー協会長



マツ



おたたちもクロアチアファン



がんばってますボランティア

ふれあった心 あふれた笑顔

5月22日夜、代表チームを歓迎するためのウェルカムパーティーがホテルベルナディオで開催され、約130人の参加者が心温まる交流を行いました。チームの健闘を祈念し、十日町市長よりクロアチアサッカー協会長に国宝火焔型土器のレプリカが手渡されました。

また、5月28日夜には、クロス10で市民とクロアチア関係者との交流イベントが催され、チーム関係者や同国の大報道関係者、市民約350人が参加する中、もちつきや着物ショーなど日本文化を紹介する楽しい交流がなされました。



写真提供：共同通信社

ほら、スタジアムに舞い降りたよ ぼくたちの夢を折った千羽鶴



クロアチアへの思いを込めた折り鶴を両手に持てる子供たち(中央小学校)



千羽鶴を渡した馬場小学校・四珠田分校の子供たちと選手



杜行セレモニーに集まつた人々に千羽鶴を高々と掲げるブロビッチトレーナー



友人との別れ 勝利を誓い選手は決戦の地へ

どんなに晴らしい出会いにも、別れはやできます。6月2日、クロアチア代表が翌日のメキシコ戦に向けて旅立つ時がきました。別れの朝、ベルナティオ才助前で行われた杜行セレモニーには、クロアチア代表を見送ろう、市民など約300人が駆けつけました。チームを代表して、マルコビッチ協会会長は「市民から贈られた」「どうか仲のよさにに戦ってください」という言葉が胸に突き刺さり、一生忘れはない、選手はクロアチアのためだけではなく、愛情をいただいて

た十日町市民のためにも戰います。私たちは旅立ちます。しかし、この別れは本当の別れだと思わないでほしい。ここにいる選手が将来的に監督になったときには、必ずや十日町に新たなチームを連れてくるでしょう。いつかまた会いましょう。」という言葉を残してくれました。

また、チームからの贈り物としてサッカーボールをかたどったガラス製の記念品が、主将のシュケル選手の手から滝沢市長に贈られました。



シュケル選手は「これはクロアチアを知ろうとした町はなく、素晴らしいキャンプだった。今度は一旅行者として遊びに来たい。」と述べていました。

最後に、市民らが「イデモ、フルバツカ！」(がんばれクロアチア)とクロアチア語で激励する中で一人ずつバスへと乗り込みキャンプ地を出発したのです。別れを惜しむ多くの市民とともに、ホテルのスタッフや関係者が手を取り、感動で胸をつかせている姿が見られました。

そして、バスの中の選手たちも十日町市を走り抜ける際、市民らの眞の友情と純粋な心に感動して目を潤させていたといいます。道路の両脇には、クロアチア国旗を手にした親子連れ、年配の方々、沿道の店の人たちなど数千人の市民が道路に出てきて、選手に惜別と激励の気持ちを込めて手を振りました。

バスは風のように走り抜け、夢と感動の14日間は終わりました。キャンプ誘致で名乗りを上げて以来1,098日目の出来事でした。

